

クリスマスメッセージ
悲しみのさらに向こう

友野富美子 (日本基督教団深川教会牧師)

クリスマスがやってきます。クリスマス、私たちはどのような言葉であいさつを交わすでしょう。「クリスマスおめでとう」「メリークリスマス」。おめでたい、楽しい、それがクリスマス。

でも一体、何がおめでたいのでしょうか。

「今年のクリスマス、おめでとうと言ってお祝いしていいのでしょうか。こんなにも命が脅かされているのに」。遠くを見るように教会の方がおっしゃいました。2つの大きな戦い、たくさんの紛争、日常的に行われている虐待や暴力。世界は少しもメリーではありません。

クリスマスと呼ばれる出来事を伝える聖書も、その記事の最後に、ベツレヘムの村で起こった事件を記しています。「さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた」(マタイによる福音書2章16節)。当時イスラエルを治めていたヘロデという王は、「ユダヤ人の王」が生まれるという情報を得て恐れを抱きました。王が生まれる？何を言っているのだ、王は私だ。ヘロデはそう思ったことでしょう。自分の地位が脅かされる。地位だけではありません。「自分が抹殺されるということか」そう思ったでしょう。

それは未確認の情報にすぎませんでした。遠い東方からきた占星術の学者たちが、「ベツレヘムにユダヤ人の王、救い主が生まれるという仮説を立ててやってきただけ」かもしれない。それでも、ヘロデを不安に陥れるには十分でした。さっさと殺してしまわなければ。彼は「見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」という偽りの言葉をもって、自分のもとに呼び寄せたその学者たちをベツレヘムへ送り出しました。

しかし、王となる幼子を見つけて礼拝した学者たちは、ヘロデのもとには戻りませんでした。別の道を通って帰ったのです。それを知ったヘロデはどうしたでしょう。先に記したとおりです。

自分の安住のために他者を抹殺する。なんて酷いことをと思います。

自分たちの領土を拡げるために隣国に侵入する。民衆を支配下に置くために弾圧して、盾突く者は容赦なく殺す。そんなことが許されるはずはない。その通りです。

そうやって人のことを責め立てるこの私が、自分に従わせようと子どもを叱り飛ばしている。小さな権力で人を支配しようとしている。そのことに気づいて愕然^{がくぜん}とすることがあります。家庭で、職場で、それは行われています。ヘロデは私ではないか。聖書が語るクリスマスのこの出来事は私を、あなたを映し出しているのかもしれませんが。

爆撃で子どもを殺された母親の泣き叫んでいる映像が頭から離れません。悲しみと怒りが闇のように世界を覆っています。なぜ戦いは繰り返されるのか。そんなことをしても少しも幸せにはなれないのに、なぜ私たちは他者を自分の足の下に置こうとするのか。

愚かな私たちのこの地上に、誰よりも低く、みんなの罪を背負うために神の子が来てくださったと、聖書は告げます。この方は小さな村の家畜小屋で生まれました。社会の不正義に泣く人と連帯し、闘って権力者に憎まれました。捕らえられ身が危なくなると、近くにいる者たちは逃げ去り、孤独を味わいました。そして十字架につけられて死にました。この方は、私たちの痛みや悲しみや生きる苦しみ、死すらも身をもってわかってくださる神です。

殺された子どもたちのために、ヘロデのために、私のために、あなたのために、いま命を脅かされている人たちのために、また、進軍している兵士のためにも、イエスさまは来てくださいました。世の理不尽や自分のどうしようもなさや悲しみに暮れる私たちに、この方が伴ってくださいます。ですから今、こう申し上げます。

クリスマスおめでとうございます。